豊後日田俳人句集

特別
ヌ4
4899
11

宮崎市郡山文庫

豊後日田

鞭石亭

樂水子

春

波清し惠比須に帝さゝ〻紙

夏

さゝ〻人雲すて行る暑の事　仝

秋

初秋や京ぢすきくゝ土の恩　仝

冬

まゝこ炙如雨を上ゝ石の彦紫式　仝

歌仙

本とは雪花も光を移すなり　樂水
多紫ふさ海しの吹うつる山　空　舍持
大文字や多き吹をもわらひて　巽我
からひの窓をの多く呉舟　淮山
鶯の啼たるまよ黒き毛色こ　松架
くりと牡花光まるまき旨　巽我
神の事て相撲をもをを待影山　空持
僧多きんたれ女すほ　樂　樂水

琴ゆ師の器量はすをはしき　淮泗
毎病は下昇を土用八專　巽我
新田は名を儲すき寺号は引度　松架
舌もけひしく大なるうの郎　公
風邪のたともを崇門見は山名　樂水
手元四五十　女佳ゥ　深入　舍持
素人の音は器を多く鶏の月　巽我
三ッ俵く掃く流星氏巻　淮泗
奈作は領貯と茶保熊はうし　松架
器業まく欠為乃供　巽我

各
紙書もとハ出のし社角茅　舍棟
異見をすこし紙に表風　樂み
おとし磯の青きも若菜摘　淮巡
晨夏乃きく〳〵又黄ふ衣　琴舍
笛好ハ猶よ楽ほのを敬実ま　淮巡
ほたく〳〵を薄く白雨の滝　松架
岡岩の橋よ岡物思く形雪　乗水
吉日の間ま合し　打　栗　美棟
脱ま　ぬ〳〵　嘶乃嘉悦ハ　淮巡
冊生意　招よ琴毫加侍枕　仝

鐘をくよのもの古もの乃音　委架
岡もの古よ注ますとあ月　琴舍
窓すま小只空蟬の工藏ふく　淮巡
観世ちゑ忘しよほふ若殿　樂水
咲ちく〳〵ハ隅田川原乃小豆餅　松架
犬弦鄙も掃ことの古ものり　仝
中キ書原空敷く〳〵を昭日の花　舍棟
雁帽子弦初も、水き茂活　巽我

半時庵

元旦

初日清清〳〵一日咲暮き都の春

梅

去年落て抱清く梅に若木哉　仝

塩鯛や寿よ一時風乃音　仝

春興

雪に帰る右京入日の影　仝

上巳

親雪に神ゝ勢集代寺に雛　仝

豊後日田

哥僊

見彩狂小夢を破て明百り哉　巽我

乗脚を仕立寒菓小酒　舎梼

筑郡鷄山乃名のすさびて　松架

銘も切屋手豊年に秋　淮岨

月雪て変も涙邊も炊煙　其外

雲洛に香高き岩乃下道　舎柳

快き初稲しるゝ秋　舎梼

去〳〵去〳〵女房金借て来体　巽我

世渡りを抱うらてふ語おりし　淮岨

地蓋乃　灯も時雨盞　松架

因社蓼を払ふ卯月の雪まし　舎押

馬乃耳ふも風薫るむ　其外

きゝすまを廿余りの庶れる山　巽我

帝の火璃ふ篠は孝行　舎椏

名月社角トのとれさは表の月　松架

善の三里社あゝ芹摘　淮岨

吹きすく被の内の汐干潟　其外

垣乃見乃風敲く　燕　舎押

大把乃椿社賣るは泉岳寺　淮岨

風呂の花巻は罪を初雪　巽我

後を河社着きゝ母もすゝる紅上り　舎椏

三ッ四ッはゝ乃接拵こまり　松架

酔酔や嶽とかゝし氏水鉢　舎柳

遠き社憲りまゝ亮む　其外

巻深乃昆負のるゝ生、り　松架

宣業拵ふ内も貪法　舎椏

上乃白を糸物おしてかゝる　巽香

淀の大工の別く朝起　淮岨

昼中小尾花乃招くうゝ新　令柳
鶏頭小鐘振〻ひ土竜　其外
十徳小弘法紫色ンて著乃鐘　松架
腹鼓　此所　林示　制　巽我
霖雨ま感状社も由破邑禊　其外
滝も抱辺も屋敷ある哉　令柳
夕日茅へ加（毬場）ア小兼乃ゆるし色　令楼
草若しく岩冠著新鶏　淮咀

きゝぬ孤一見の言辺冬裏
ぬるゝ世八重汐路を
乃き異の家州中港の濱よ
船はふさ冬ゝ毋月社来
さゝくこそ侍くゝ
見〻侍新八重見月は発
なるゝ事冬冬

豊後
日田

鶏のさを祝ふかく　松架
鼓く神の為ゝ

八の坊宗匠鉢西り節を
引くも是老波乃徳澤り
ら屋那たるもとらんの〜宮
語しめふ子も未梅花の曙
道をし たひ老波の一樽を
も舟ふし深をのたるもとて
まく其澤を友し 給ひ屋かくしも 全
梅ゝ香のあ事自考りあ〜乃きく 淮岨
嶋谷あ玉曙
水〜矢ても宮り冬〜ゆ梅一の郵 仝

仝
徐よ宗匠塚も村あ屋小巻の郵 芦千 日田庄手
芳はゝき風やゆ巻の日ゆ〜〜 梅甫 仝
仝 あ玉曙
芦曙や雪も孤命〜波堂あ多 文泉 仝
仝
風流才白ゆん雪乃玉郵の枝 梅夫 仝十二
仝
芳はゝ紀州もわ巻乃麻学系 杜山 仝西山
曙や此本姫巻 序 蘭吹 仝

接杯　お亨昭

日田隈早

義方紀も手伝ふきき　松乃小姿哉　時尋
清川影の中やふ美乃笑ひ山　蘆士
花よ葉に見とゝ孫屋し牡丹　可鷺
待う事て傘ま川のしき晴雨ち　里舟
記ゝらゝや茶の花花者も皆ま屋　秋吹
新高く色牡丹と色ゝ玉ゝきき　汶水

仝

伊白髪夢粉清し　筆烏

小秋ちゝ

哥仙

立春在臘十五　豊後日田

かゝは〜や毛ゝを待雪ま川の傘　湖時雨
禊ハ吉久紋雪うすれ庭　舎梓
米ま字繪も川しゝ留すて　可暁
車屋とりふ引ちゝに苔　春和
章経さハ乗やゝ角むふ帆の神琴　故暁
夕くま毎ま引うやさある里　桃潮
蓑笠ま小山ゝちハをゝけ　枕　魚人
雷ゝうも大ハ花のきぬゝ　湖雨

辻うらも呉竹の節乃ゆしれ数　春和
住相まをとりあゝ付給　可曉
眠りの一盃き夢むゆ秋乃やゝ乃　梶澄
本紙をみの花上の名月　故曉
鶴ふきて世を振袖下の医者　金樓
をしとゝあしとゝを編し天井　奥人
仁王うゝふゝんてすゝの源　常　澄曉
落ぬすかしも敬外の伝　梶澄
成角行き夢の白さゝく花の滝　春糸
庚杖うゝ風多く年　市　金樓

橋乃上井遷を病やて几巾揚る　可曉
手あたゝひの花ま智　紋　故曉
垣乃夏の宛かゝ物ゝ　故曉
菰を若かさり菰鉢をひゝ　春糸
八景の朱をうをひし漁の市　魚人
宮の奉加乃ゝりふゝ庶　可曉
ゝゝせんり白ゝ残ぬ明の乃ゝ　梶澄
たふきゝゝと右をちゝ白いち　故曉
近年の蘭ハゝゝゝ　金樓
雑々り味あふ多ゝ乃春　魚人

駆猪のはつ川く袴ひ連　奥人
名所の外をさらに献立　春和
だく度き一白孝乃大工小屋　潮付面
むら〳〵かさとゝ松　桃潮
皆音も四季す鶯はうりこ　板曉
さ〳〵ほと色は雨の中入　可曉
貝原や仮名ものとても花乃友　金棲
ゝりたすはたゝ乃春袴上下　魚人

歌僊　豊後日田

吹声よ巻きお乃のけ川音かゆ　可曉
鴨舟入江りつゝ保船うさ　舎梼
大厨杣もむさし野いつゝさて　鳳水
香ふむ人ハわ乃の花人　柄　故曉
不ぬゝうお主まよのさは雪の身　金梼
はゝぬさとめて主花嵐尾仲　可曉
方丈紅覓をうゝむ麻の彩　加曉
立る筆もらちて碁ハ持　鳳水

智恵付て天の浮橋さらし板に　の曉
池ち沼をす　和子舞臺子　舍樓
名而已のゝ近江生まれの一和歌　風山
羅小袋しき　夏の夜短　可曉
をゝと八幡宮の宮り　大毋屋ゝ　金樓
古今もをゝ入唐をゝ　板曉
異見以外道具とも　加根来橋　の曉
塩百見ゝをつき　窓より降の巣　風山
狐花す教きをゝ　ゝ哥かゝ　板曉
底夏と在りも　桃の酒しは　金樓

まゝ撫ぬ橋へさゝゐも　冥加銭　風山
天倪も出ゝ　ゝふ百の頌　の曉
吹ふり市世界孔ち　ふ砂の絵　金樓
章魚の足ゝ　板曉
一生を苦しゝられ　家たゝ殺　可曉
不斷さゝゝまむし　提重　風山
女房ゝ市海大厨　斗の高ゝ　板曉
あやう足をの船へ　金樓
名月よ裏表なり　孔住居　風山
苦しあ山子の神　ゝ祈ゝ　の曉

蒲萄棚　きすろまとしあはあの柚　今樓
仁王のふくとつめし　田樂　放曉
欠落の野寺の饒舌す屋はあの風
毋松らさけて　新地定する　可曉
檣八千の矢先のとく多ろ　故曉
御朱印ふ彩らん　丹頂鳳水
鬱にも鈴ゑ　碧りて　蓋乃里　舍樓
蒼ちんすい　角さてあさ風　故曉

菊の下蔭ゑ寿をかもし　むのし語
ゑ無枚置如早苗ゑ沈すゑ葉を
さし芽を撫く　弱ふくゑ眼を洗ひ
紅ちゑふ蒼の玉をゑ結こひすと
保ゑ弱如屋ゑ盛ゑ世ゑを
待倦如市ゑや頭巾ゑ多酒をお
し歩添翁も赤酒拭のしゑ
ゑ陽ゑす白のさ死ゑ桃子
の口ゑ角ゑる　ゑいとゑ死てゑし
少し盛ゑ　ゑ沈ふ比ゑ芙蓉或

烟草と酒とあと香ハなくものかな

又たゝ想ふ〳〵ばや菊ぞきく

其外の名ハなくもの那とハ蕎麦

の楽しみ〳〵かな　五十種乃

花子よりやさしき清好士の秀作を見て

も又楽しうゝ〳〵ばや

時人を　湖時雨

まつも逢ひ聖　述

菊乃花

哥　偶

豊後田

常盤木を秀〳〵古し落葉乃　春荇

雪もたはゝ〳〵ばかりに孝馬　舎梓

建仁寺棟を筑波の雲夢亭　海賀

釜のたきりもうゝふ釣うせ　桃潮

追使のこゑ月見の友よそゝ孤　可龍

夏の毛耕作学のわきぬ　苔

吹く風信田の村れ軒たちい　棟

出世はあしふ樽臼ゝ飛ゝ　賀

焼しさも筆とれば老白髪　潮
小翁小助者〳〵老て上首尾　竜
小雨々古のくし笠沖乃船　苔
庵具る面白小悪筆の状　棲
汁意地ハむのしかるの福の神　賀
為ても月を蓋囲すもむ　苔
浮ふしも面しちふ花乃横硯　潮
寄ぬ者人ふあふ坂乃妻　賀
鶴ツうハの空月をはるれ雲　竜
うし坂渡りの絵の具四はく履　棲

入相乃あゝさまを伝住居　苔
桂々社留を去れ十月の松　潮
天竺の紀行もあろ山おろし　賀
はゝ〳〵れを人又ぬう姫乃　竜
棟上々の餅も高蕾う原ちく　棲
本の下蔭す蕾る定まふ　苔
神さま後接嫌朝　潮
まつさうりよるのし上るし　棲
おゝひ森の枕ふふ好ムうん　竜
雨後小服す面す蕭塩芳花　潮

飲たち除三五の盃も月の宮　賀
のこりなく　行日迄々れと　竜
泰ゝ　ちんゝ音の則ちゆの竟　麦苅
理化彦ふもの高　住職　海賀
雲らさ夢名のゝ待たゝ織　可竜
彼者　銭ゝたちも陸の駒　拙作
産宮ゝ地もかしゝ所たる花　金樓
降る日も飽ゝ五々の裏風　桃筆

哥仙　豊后日田

明ちゝ紀昌生のすゝさや友千鳥　岩秀
石落咲安ゝ重布ゝ音　舎梓
服息を産ゝ机ゝ変ゝちて　虫飛
雨をはゝゝ一雫のゝく波　車牛
玄関ゝかゝゝ男乃形のれあ　角馬
初ゝ月ゝの色を添ゝ門出　桃秋
瑞ゝ離と脇中金ゝの蔦ゝ　百川
葉ゝ笠ゝ若ゝ面ひ古きも　兎風

廣東を口にくゝ入て蘇春深し　梓
自慢なくしたる扇で月實　秀
松風の雨に向かう頭陀袋哉　年
鏡のわれも大和路にある子　乘
顚倒空にこもらせ三五の秋　馱
新酒の酔はさめぬ孵明々　る
秋もまだなくかれ老なるあるまじ念　風
彩を画り日の影なるなる　川
手を拝花よおりひの十寸鏡　年
出来しも余拾ふ沢へなかりしめ　秀

二

あし曳乃山路も表の錦荻山　乘
朱欄にすぬ花あるや萩いしや　風
俵まみ蟹と香車乃人つかひ　る
月は晴過て夕時はしまる　馱
松かしそのうつきまとまれ水の音　川
雪さこのし見ゆる山とかしやう　風
臺前唐天竺乃寒げなし　秀
風も掃くさくま畠かけすゝ　年
若葉なる香しきとき女丈夫の　梓
雛り並木を月乃足代　馱

封きゝぬ文も身に入む秋の香　吉飛

白小鏡も澄きもむきし窓　角馬

山とゐる有馬太夫の供奥の篭　宛庵

おり〳〵ハ淀川の水　百川

ひすこくと眠りも文字三巻三　車牛

夜ゝ玉ゝ鶯の友　聲　岩魚

宿とゞまハ一日おき〳〵花の旅　金樓

艸の波よろ〳〵萩ハ〳〵　紀里　桃秋

九月廿

霜を踏庵と夕アもかさりかな　舎樓

門人百代翁国の寺石を三ツ二ツ神へ
しゝ奉り是をかつをふせとも漢
山地、寺、しまを比名を名霊を
ともに
八重九ふくらしまふりしまれはゝ
ふゝ

古詩意を作るもの本の梨や玉のハ

西来堂をたゞ瀬戸に村京夏方、
京都の猫よりて一句すあらし
京摩八集既出あり

是も孫兵衛の名を仮り乃宿し

御初夜日田博多屋桃之紀之夢

樂しき君へ拓うとや
國廣し永くとすゝめの富貴 仲 合樓

東武の春浅帰庫を待ちも
祝慶乃余ゝるも お梅の花

私架彦へ拓る色芳書暁
久くやゝ世ゝの松ゝ後ちと至、

進世ゝ中へ接杯 あ古原
ゝゝめの伊勢ゝ色ゝ至ゝ春ゝ
至四風ゝ方ゝ春ゝ一席庭ゝ陸地
井と家あ
ゝ清し徳も 稀孤のたゝ海酒

探題 哲言 文拂

三ツ井すゝ煙を四ゝ井の廿日哉
色惜

拉ゝ妙ゝ小表四ゝてちゝ子、

芳郭

ゝしゝ女社に小もゝ折はーあゝ、
地内とゝぶ山ゝ観音堂あり日西
東社 二人四人ゝ小指ゝ西八明
ちゝたれと左右八詩耳ゝ加ゝ
其上 鉢蜂多く 詩て八 庵人 庭ゝ
小三方 方 記ゝき 京 色 宮ゝ あ

幸 盡 のゝゝゝゝ ゝ 時 ゝ ゝ 小 芸 堂 、

十三日会式なれハ桃之桃溪亭於て
其中 詠ミ出はる之居ヘまゐき

むかしましや七字ニ八ッ手花の君 集樗

時雨

咲き晴らしも冬近の山 冬月 光仲 、

又

育人ハ顔を見きし紅葉かな 、

湖時雨の花壇ニ亭

家根を渾 一月 小春菊 、

其田の徒好士、柏ヶ近接杉の
句とくきしられ見晴す

寄仙

湯の井の湯気をちらめく枇杷の花 豊後日田 松夫

春ヲ待ツ桃の冬志ぐれ 舎樗

棟上ケハ木槐の袖も梅さゝて 青角

臼杵海ノ里ハたまさう風ふ山 九皐

名月ニ添ひさゝしの根蔚人 仝

芭蕉の葉結ぶ志てお音 松史

ウ
むかしも堀ろう紅葉 柿ノ康 仝

持病かなまでをとし百の賀 青角

秋つゝぬ時の母ハ涙者乃葉　仝

萩ふるさとかのやうなるあやの　九百年

志ゝとかのやうなる表の風　仝

遥〻く都のまとを曲あ　杉丈

山川ゝとこ海生の蓑の一角戦　仝

大江ふるの名ゝ表　志賀　青角

妨ゝをし一源やまゝ絡ゝ蓑　仝

人ゝ絡ゝ絡の絡ゝ水　九百年

四つゝ絡も蓑を蓑の蓑ゝ　仝

蓑丁ゝと伐ゝ也　月　源　杉丈

二

栗拾も時時哀かゝり　仝

合点といへぬはゝ　雄　青角

夕陽の射の袖ハ寒ゝ　寺　仝

蓑ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　醉　九百年

范蠡ゝ乙ゝハたゝ　口銭ゝ　仝

さゝ源ゝく吸ゝく　関源　栄の戸　杉丈

そゝふ絡布子も絡ゝ　奥之　仝

雲ゝ大蓮心奥ゝ　蓮の白　青角

松山の松ゝ　食のたゝかゝ　蔵　仝

本魚の濁ゝ　ゝ雲の涙　九百年

大空をうしろ屋敷として月おもしろ　仝

ゆうあらやうの秋の俳諧　松夫

鶯路は世の近江の君なりけり　仝

律義一徳村乃帝　九皐

畔つたひ水の流のきくと　仝

ひさかたの空おもの駒　松夫

時津風伊勢へくと花の人　青角

九二三里　雨きりの町　仝

歌僊　豊後昌

冬へ春を形ちや梅の二の山　斗方

嵐の中や春の岸より明て　舎棲

古成船浦も厨子牛目のやせ時て　几嶺

富士と風の左てとつて　斗方

星茨やミ子丈けの淋しき影　春荷

雲をすり原留つ重ねの玉

漸寂し煙すむ方川むこ山の

西郊外絶　果もたく消

腎惠ぞぬ影ひなるそん海の海

ぬるとは顔は いちたやき太刀

方ちの人ん遠ひち花あ為め

書くふ 裏は 衣ての状

山川の春の水にまてを捐

暁月のそさくと 醒

身を入るもも寺と思とのるまて

閑を拓さめむはめる紀物語

花巻り 霧ぬ顔の世界る

逆をたしを毒中の春

抜刀も征り 似原沢生堂

吉雄 義指ハ 押ハ 紅

悟りてハ 殺 彼は 苦も 時人と

六月ハ留を有あすて吉と崇拝

大笛折をすをの代日ておや

邯鄲の夢 須磨のかこもつんん夢し

昭書をさもたかとふなり玄

雲 サくつと 蕗 林の空の

駿馬月の枝折のきるやさや
一層よたたなる苔生まの綿
擂の弓掛衣ふる時雨代
墨の先ふもはまふ福力
河内山茶焼ひまと篠ぜセ
田へり舟ゑ云 待る樽
埋ミ墓所すて荒むしろ
看うゑひるもやひさうらか

荘手文泉ふく
眠ゝ如や宮ふ為ち行ふ山花氣 舎樽
隈町時人、接拶
初時雨ホ〻もう源四ふ原行人、
仝筆馬、
夢ふ四ふ原行長ふ雪の馬、
十二町抽夫、光氏
言迄如や宮さ言ふ富ふ氣、
杜山茶ふ茶ホ車ふ茶セく
多仙の富光ふも車て糸柴ふ、

摂録千鳥

府より行僧をむかふ使ちらす　八千坊

素餅素

醒井やかくれたちさるの苔ちる　丶

大津絵

神代あるかナ三佛やるはゑん

盃

酒中花のあるくもあのかはり哉　丶

囲炉裏

長老の酒を笑ふ海見ちる

長餅より出ある老をのやうに張賀

出老酒や　庄屋がかゝる　乃舅　殿　丶

年越より庄屋を呼ッ張賀

福ハ内、豆一ハより　冷ると　夢ホ子　丶

お元年浪乗るその白幸寿

梅雨より南瓜をのやうに張る

狂言ちん八条の　裏　乃　縄　丶

庄頭一ぢ見銭を拾ふ張る

銭乃名ゝ多月と乃月ゝ何ぞ　丶

津元ゝ多月ゝ何ぞ　丶

一日高野相ノ行探題

神祇部

為業すゝ清き松の陰の水　雪樓

苔筧松高

下方の帆の下繋る屋形比丘尼舟

苔塔高

古さ深く枝なすも秋の元無青ゝ

清水仙

俤高く小仙やはんてる醯ゝ

連中探題左ゝ

白雨後

三日めやさゝ川とゆつさも汐干潟　春荷

十四日盆

玉ゆすき魂待宵乃あさゆき那　鬼風

芋野菊

咲しあむしかもくし野と土産うち　風水

夜乃秋

餘方の戸を叩くも母の水鶏の音　雪樓

田植

笠乃影もあの浮し田うゝ可南　魚古

井戸端

暫く高き月夕べや星ぬけば井筒　春水

神祇雪

星のかげや雪ぬ系畚の一はけ　百川

冬ぬ庵

角ゝ前刀ぬあゝしを庵ぬ枯野哉　潮車

寒鞠窓

涼しさや振袖ぬ軒ぬ吊ぬ　春賀

枯柳

雨ぬ窓ぬ庵ぬ枯ぬ雨ぬ　魚吉

火燵

人の代ぬ人ぬ代ぬ火燵の淵ぬ流れ　加羅

茶乃花

茶ぬ花や雲ぬしをぬの落煙　千山

薄水

萍乃竟ハ川こ寄こ寄こ　蝉雨

風

さゝうくしる橋ぬや橋ぬ夕　梅支

神祇冬

洗ぬ夏と合方境や厚き白星　鬼風

牛車

角文字の輙す起居素くの事　故曉

古寺寒月

眠るとも消るや月の霜山寺　桃潮

冬祝

朝日の影至るのし酒杜氏　八千坊

仲冬中の三日鬼風桃秋の二人な
分担とる迄其名うるき英彦山す
詣るすこすし　ゆくしはきの
幾年よりかすてるそ冬の花枝哉
雪ととあるめ　ゆかり

かとうあて寒風松や霜乃こ風　今蓉

鬼風先よりて世ハ漆屋とたと
冬ゆくを仲とと紅出せ冬海　たく

中山とゆふあて年樹の淫を守

中食や日向の仲山茶のこ邪魔

丘城鬼とゆふ山とうこと魚岨をうち
の日の海ホ西風八山の名に初色ち
枕ゆ有もとりこと年八十四世孫

猿眠る山も鳥く乳の吹ひ枝の霜　桃秋

先達ゆ鬼をく色とやふうかが
雪ちやと枝のてさ陽やうふと多　鬼風

[illegible]ハ打解の賜ありて地をふまず

[illegible]ふ浴ぬ本の梨の孫あけ哉　[illegible]

名まをすし花月のみちすと
[illegible]
て川すよりふいつをの竜を[illegible]
[illegible]

月巻も碎き時[illegible]　波　[illegible]　[illegible]

梅[illegible]　[illegible]　波　[illegible]　[illegible]

瀬よりも[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　梅[illegible]

[illegible]

玉[illegible]

[illegible]

[illegible]雪の[illegible]　玉[illegible]谷　[illegible]

[illegible]山鬼石坊とふるやと[illegible]
[illegible]
しきりもれ鬼[illegible]
[illegible]
[illegible]

時雨[illegible]　[illegible]

[illegible]の雨の[illegible]
[illegible]

かさしたるさくい[illegible]とかくさも[illegible]

[illegible]十四日[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

下山鬼[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]中[illegible]風し[illegible]の玉のしい

九州行脚、入りしまと太宰府の
清原、家居の志し屋敷を
時者見て思ひたちたんと云よ
さすがにうるはしき茅を長くとり松原
乃屋敷幾ばくか残りて昔を
松原はんなまつたにうつくしとすと云
風うしろ者しを自由の連社ともく光
姫ふくとちちまの美しの見ふるあの
遺跡の碑を原の方を入りて光りを沿革
と彩月廿三日鬼界を経て日田を発

うつ原邑長賀春の名を伝ふ
起くと云ふ高し鉢ちくを
谷口郡の名は風ぐ山もの小の小山
有主光の城さまを木おちふ
宮名古多さくに あると王の墳
果村一夜川の築あり
岩まぬやちとるの松の築ふ屋
樹坂かくひ坂ぎ久美宮風出を
屋風山あさともさ山さ時節の古
周防風宮宿「ひ宮松」河のうは山ろよ
下者天皇の侍剣神の田代ありと
刈り坂の宮にもぬくなるし郡

あ免須ちや菊ぬ家の古はし紙　鬼風

菊川といふ古河ありて一筋ちれとし

本川の手かしのふとあるふ

舟ゆくし矣大淀大堀乃はなし哉　鳥樓

手前八軒本と云宿ふ泊る

名をめて汁もあまれの三笠の郡、

廿四日引に阿さゝ峰［長者町ニ雲

冬ほさん家ニ侍るゝ世　長者畀

同楼　三月村　観ラ斗

実々垢離やむちうまこ頃ゝ波の花　鬼風

二本松越寳満山大権現廿五坊ありと

堂あく満川山や鶴鷺梅の野邊　鳥樓

太宰府ふいまうま先連歌屋坊ニ着
て清札梅の御守と頂戴しまり聖廟へ
参詣す御本社の結構いふもさらなり
おりすへて九州の諸侯御歴々より
奉納の繪馬燈籠数々猶又皇都
東都及難波其外諸國地下よりも
御宮の有かとき御神前ニむかひ奉
献したる繪馬かぎりなし川くいあまと
池の鴛鴦鴨も人馴れて飛梅の古木
かしくし上矢て拝よめいし尊き哉
あかし

左納

むかしきくしふ志らぬの名や神の梅、

梅の香はさ香に秀し神乃庭　鬼風

清いと浅を出て 観音寺戒檀堂
糸田郡 鹿楼を廻る二八のしるしと
其のみち小さき石碑たてり 紗み

諸ゝみ尾もなし冬木立 象楼

聚屋桐ツヤウク々 揔夜 博多、
若竹青笹嵜、ゝ宗清 宗福寺より
禅院則 福岡太守の清菩提所にて松
原の間に千利休堂奈比地堂々所の梢
有りとも

茶の花や松の木盛も天下一名、

笹嵜清許寺の額に 範国降伏
せり

門前て鉾なし 舟の中、

清宮の涼先を千々カ沖とよし
吉野涼を向ふまであれば寿しく染む

其乃里かさしまへて水の人八ヶ月なる風
とりに流上なすさ有し廿こけるに見て馬出
色とりの原あて旅出る有し中仲に至
前の枯野とてあへるせ三尺余幅一尺
程の石面に不見石ト見え先染へ清様十し
其仲ちをみ

夏濃山しと向ひ笹世の宮さ去、

糸田藪 松嵜の古巌墻を見 香椎の宮
に作る

昨許まよ香香し冬の梅、

冬も松椎の香清し神やしろ 鬼風

清枚とて出墓の虎ありと欲 大木識
又嵜葉の神 本の見白八なし
廿八日出るを立て宵よりも蔵降つも
見知風名本さるも患鬼風給の始終
大日ふてこの間首を立国とさする
り

鬼貫や百代の過も玉ぼこ　鬼貫

福岡　大西あさこ　姫之濱　名の濱

塩竈や雲といとこの姪の濱　〃

鶴の松原よりの波高しとも　〃

山々の飛世々の松ほのぼのと　〃

右の方ハ玄界灘打うつる波の音すさまじく物凄く小高き所にはる日のやうに

芦屋の海や藻刈の日しを冴凍の月　〃

橋牛　梁井　軍山　筑紫郡村の

約束方より止宿勝軍山神宮ちかのあり

アラバヤ　一皇后三韓を征伐の祈願

此所も皇后髪を結上ケ給ひし所なり

祭小石上ケ小社此内にあり

伊豆義が玉ぐしあや玉かしハ　〃

此内東村と立源江村恰土塚姫塚ハ

姫島や志賀しめさして彩ふ秋　泉風

橋山　玉島川　ちのうつ亀

月ふるふるもの玉しまや　いしくま　金樓

源蔵村其父方ハ一宿越月野より立

此の松はもと志賀山の松ハ実結

又も見ぬ命の空たゆるみしの松　〃

頭巾　麓山を

赤き蛙や色しらの麓も山ほうき　〃

白き蛙ハ神の威　雪の死おりうの邦　鬼風

鏡の神社にて

居れ子も照させ給へ冬乃月　舎樓

松浦川を下る

何処までは川船友ちどり　、

唐津の虎城下を一見して浜崎迄を
牢宿に泊
二日領ケ谷峠を越す身は黒髪山を
よそに遥る思ひ又さまの心すゝり
峯くさみかなしんとおふに

黒髪川名残かゝる山も雪の明

嬉野温泉に到り浴しあきくと

うましいやはし気くて子二日月　、

嬉し野や温泉と桑の湯音聞所　鬼風

三日俵坂関所之旅籍 松原 大村に泊
四日大村ヨリ船をのりて長与と云ふ湊
海上五里風波はげしく元船下に至山
よせよかうしして船を出す 帯保

鰐浦口の波とも谷の源里の火　舎樓

此処まで流切とも去来ひと人を雇ひ
又阿ひ切りたる口にして山々を越する時に

漁村餘光ゑ映す炬火雪の尾　、

四ツの頃長崎桶屋町田中保十
方へ着
五日町加百狸友らと栗内ふて
長崎町及び唐船を一見 各小船に
のりて湊口より土にる浦番所の巌
室通鯨舟の鯨を見るの塩の浦へ
下り岸に西浜に泊ぬる

[illegible]

みちくさよ　ちいさい　ちいさい　日本の　川かを　つる　鳥樓

白かゝる　流れ　鶴　ちりゝ　[illegible]
と　神先　[illegible]
の　[illegible]
[illegible]

ふりくらや　神の　[illegible]　先の　[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雑波　何か　月　[illegible]　せ　[illegible]　の　[illegible]　春　、

法　[illegible]　二人、　[illegible]　せ

[illegible]

九日　[illegible]　紀原せ　[illegible]　山乃

[illegible]

波　[illegible]　月　[illegible]　宝　珠　の　[illegible]　、

神　[illegible]　[illegible]　[illegible]

神の　威　[illegible]　て　[illegible]　[illegible]　紀原

紀原　極　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

田中　[illegible]　春　新宅の　[illegible]

冬牡丹路ゟ松の木はし　敦の吉　寒樓

十二月洛の紀氏と内乃長寿を

同見ゟ　矢上川ゟ松原迄　詞半

内村ゟ湯ゟ　内ゟ　内ゟ

十四日　松ゟ千代女の墓と

岩ゟ墓ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

徒梓　武雄ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

越さんゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　鬼風

湯ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

空たゝし　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　寒梅

紀氏小姓ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

の所と云ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

の所ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

修都ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

統今度上下之事芳後相扱西

三十三ヶ國之船可為苏世ゝ津

向ゝ此ゟ仕　平中納言　教盛卿

寄元二年八月廿二日

吉本安欽入道

又

於肥前國茂世津従昔丹波少將成經

平判官康頼俊寛僧都薩摩流

人ゝ別荘木宗欽入道上下弘教幸

労以為磨形美給平中納言教盛ゝ

書生状太常訳事孫雖有之於
彼者故矣〻彼義可有〻乎法橋
寺々遷宅〻〻者世律為規模歟
彼者義地一殿三廊廿歩廿五石
寺社八所寄〻事孫令裁許早

肥前侍従

寛文三年五月廿三日

太二位の状をすゝて一白

御り所もあゝて　今梅

いのち迄ぞあゝまゝ

挨拶あ書附〻

舍利弗も仮名おし〻へよ初時雨　其外

今

多上八郎さゝ　小仙花　湖時雨

今

ちし芦を美の新精やをく　春荇

今

徒閑〻飛〻〻仙　風蟬裏哉　可暁

今

侍〻し道乃はゝ　雪和あ雪　故暁

各お集男之

峰や此小春の花見を聲波風　月呑

飛さくと志はし　八重の連の牡丹　可龍

雀またのにねるや冬の寫生帖　含柳

見の鳥や小さ阿の何田を序廣き　鳳水

八千坊は〜〜塙屋へ若號（?）〜〜

無事に多進ふ扶乗　時雨のわらひ物　桃之

仝

裁る中小笹の宿とふは川音くの耶　桃湖

は川〜〜州の中なる玉洩ろき　少年　桃秋

おおあつら晩す

日よ早き其香や　霜乃玉椿　岩秀

寄り来ふも冬鶯や　はなし　浮　九皐

記

おとを起して扶ふちと〜哉　虫飛

冬よ香を酬るや花のなかめ　浮　斗兮

仝

古も又風雅の神乃猿森娘の耶　八嶺

云の架娃の穀まる玉霰し見逃すな　海賀

初冬の紅離す梅乃小用ひの皇　里水

鶺鴒枝乃月ほのひ清し　落葉堂　花亭

接待前出略

一陽を波浮く　梅乃高くかをる　鶴洞

宮崎氏を訪ふやむくさ　松夫

仝

早咲の一枝飛や　ふゝ乃宿　青角

残菊ゆう爭置縁や　宗おと　車牛

白玉を浮うるやうの　嵯峨　百車

かさなる下枝　梅の　雲西

茶のゝれやてゝ　紫口切　角馬

清流の音や　冬乃宿　百川

嵯峨温泉上中下の湯ありて一人五間ずつ入湯仕り

寒垢離も五ゝん上りの湯治の那　仝坡

其夜神詩ゝ泊る十六日久留米ゝ府中ゝ泊る日高山に入る

作約二句

おゝ雪ゝ孔雪も　ぬるゝ神ゝ　死

神を抱くゝ　の雪や　茶九十九　鬼風

十七日府中を立　善光寺ゝ

四五九　村岡日警

旅くゝや　海名ゝ　仝坡

五三四　浮見華

七日細田田永山天満宮

霜も枯ず一夜に千代見計菊の里　含樗

今大原八幡宮

杉杉菜多くましく対杉杉に在山、

楽水君、清暇乞ふとて戸の夜泊さとき
佃津帰ら鮟鱇の吸もの出しく恵子
柔由をもあもし

鮟鱇や口よりまたち、清鬼々々

浮かさや擲え方まで置

丼の湯宿手沸まけ河宮岩妙の冬、

壬猟十月ヶ立田を出でる途すがら信行す

徹書記とすまちかくり筵に書付出、

其さ云傍していつまでも不忘ぬ

旅中の吟君が代の法山畑むくぬ雨も
なし

ともよ月を愛すや此の麦わら岳、

日田より小倉への石すゝ香喜と茶すき
よし野六田までと知らぬ

古語の香青きいふりや岸さくら、

赤馬関阿弥陀寺にて安徳帝の尊像を
拝し文治の昔をしのびまつる

我庵へ雲乃ふ人雲の月、

壬猟十四日下の関より宗船にて
帰郷

浪もよし春待宵のなつかし、

年内吉事

掛け香ゑ向ふ寒空の鶴ゆく　八千坊

菊暮

ちらぬ乗や枯ちらや年茅の玉柏

仝　船遊の吟

帆ヲ押櫓派の客路や宝し急き

徽庭

餅つきやこの九鉏女の神あそび

仝　古寺暁産を吟ず

鐘ゆ深く寄れば火燒花雪月花

冬之吟　歌仙

豊後西山

流ふ日の待すりやをり村雨　杜山

千鳥ゆくとふ仮りの庇　舎梓

枝暮る杉ゆ雲風寒　蘭吹

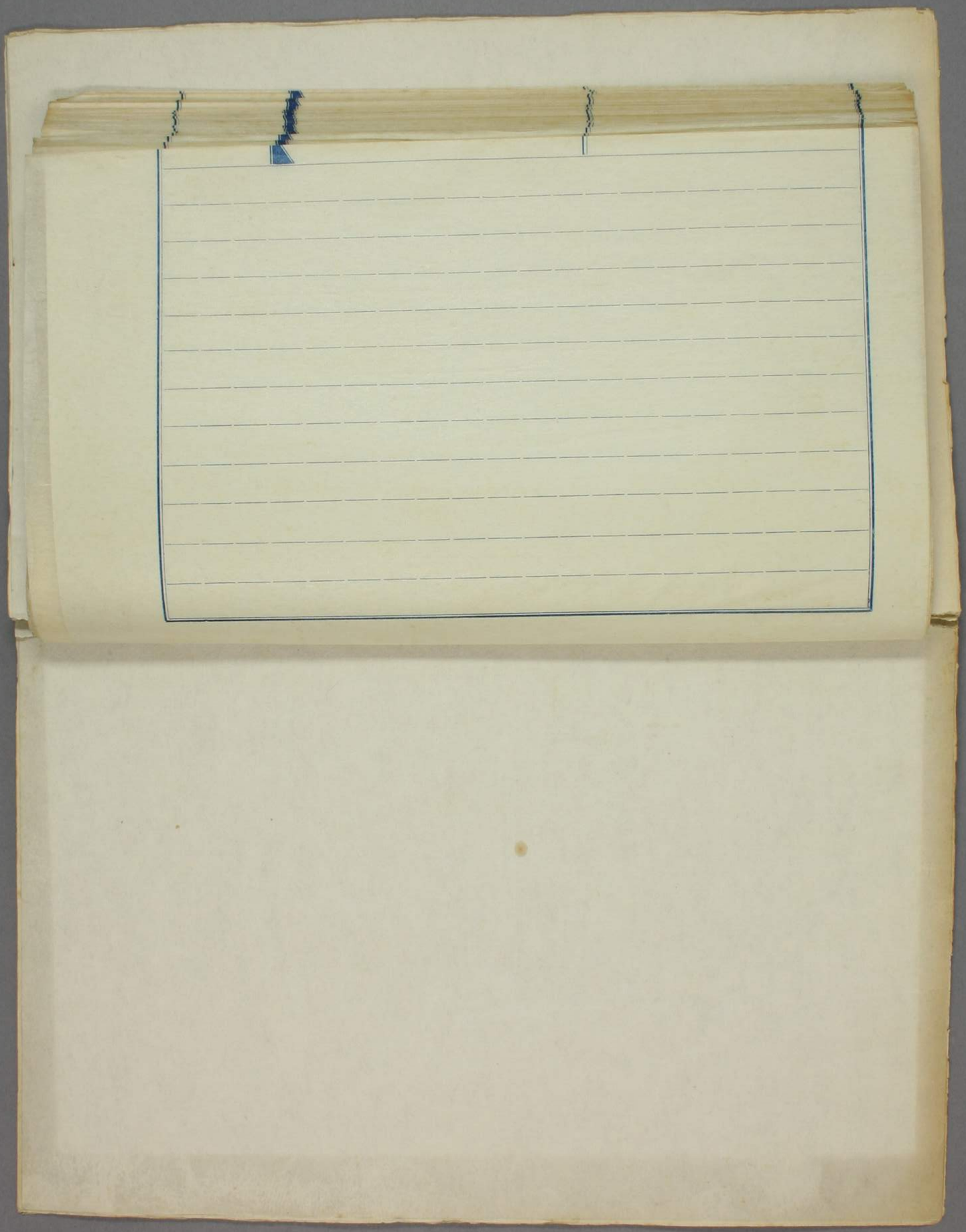
雲せゝ山ゆ大工角寄　鳳水

雲ちらし紀れをけ　伊兎　文泉

渡しを呼ふ乗ゆ渡ゆ　桃潮

行秋の塚ゆ冬風の行あづま　春荇

形見ゆきみ古の文字拓　梅支

うぐひす　小倉山の紅葉　里水
ながめてかしこ　小吹き代　紅葉　杜山
苔ふるく汗を入るとの国を　金樓
雪餅拾てとかふはま　夕雲　紫吹
小人の正直ものの春　四月　乃花　桃源
二日の月よ　頃し　幸弦　天　春芳
釣糸ぬと服を光　たもも代　梅夫
清音調　痒かり　出　久泉
花摩り　八坂の塔も　八重　川　琴水
ろくん　さ袖を　時を　川　春　里為

名
琴の弦やさ紅葉仮名色　杜山
演奏　保笠の海光　桜　桜源
撞の手とろさ八重　紅宮　紫吹
拍子　雲のつゆ　隆景　風水
忘雲　おり紅うう一の雪の紅　春芳
お寺　の川の脾胃虚　魚　春樓